

なかった。ロシア人の子供と喧嘩すると親が銃を向ける。何度も経験しているがそのときは脅しだなどとは思わなかった。殺されると思い恐ろしかった。

二十二年九月日本国へ引き揚げる……と家財道具を送るのにトラックに積み、父と一緒に大泊港へ行く、ここから貨物船に積み込み船は汽笛を鳴らして港を離れる。

あれで五、六百米も進んだだろうか。突然船が爆発した目の前で又もや恐ろしい光景を見せ付けられる魚雷に当たったらしい。火柱と共に海の底へと沈んで行く。当分日本国へ行く船は出ないらしい。父と自宅へ戻る。

十一月今度は真岡から引揚げる事となる。真岡に半月ほどいた。それは順番で船に乗り込み出航する。私は小高い丘の上から各船を見送っていた。ある日、いよいよ私達の番である。船に乗り込むとき私はお金を隠し持っていたが見付かり取られて叱られた。船は港を離れる。

これで日本国へ行ける……と思ったがその後涙が出て止まらなかった。それは嬉しさよりここを離れる淋しさの気持ちが強かったように思う。ロシア人が沢山見送ってくれた。二十二年十二月十日日本国函館へ到着する。

本当に戦争って恐ろしい出来事である。二度と繰り返してはならないと思う。子供のときの恐ろしさが未だに脳裏に焼付いている。そのためか映画テレビでの戦争関係の物は一切見ることはない。見たくもない。今はただ地球上の平和を祈る一人である。

## 終戦と私の戦後

北海道 川上悦夫

樺太へ渡ったのは大正十五年の春。六歳のときである。長じて大泊郡遠洲村で父母に従い漁業を営む。父母は子供が大勢いたから大変苦労したようだ。

その頃は鯨漁が盛んで大漁が続いたが、私が学校を卒業して家業を手伝うようになった頃は鯨の回遊も少なくなり、遠洲湖に繁茂していた伊谷草を原料にした寒天の自家製造をしていた。寒天製造をすることになるまでには既存の寒天会社との間に数年争いがあってそれまでには父は漁業組合長を引き受けたこともあった。

その後は遠洲村も生活が安定して平和な生活が続いていた。

昭和二十年八月十五日の終戦時には幸い私は、十六歳になった弟と家にいた。私達家族は私の他の父母、兄嫁（兄は応召して留守）と、妹二人、弟二人の八人家族であった。

やがて本土に引揚げることになって全員家に集まった。嫁に行った姉達も入れて十七人である。八月十九日に婦女子と十六歳未満の男子は引揚げることになり、幸い船もあり全村の者が動力船で村を出ることができた。朝九時に出発を見送った。

これから先どうなるのか不安はつきま続たが男だけである。いざというとき活動がしやすい。それからというものは父と弟の三人で何とか脱出しなければならぬと種々と準備に取りかかった。私達だけではない全村の者が舟を補強したり、持ち物の選択等で日をすごす。漁師が多かったから舟はあったし八月の海であれば動力船でなくても北海道へは渡れたはずであった。

八月二十九日早朝ソ連兵が駐屯して、十日間程で他に

移動したが、駐屯している間は、安心出来ないのもソ連兵の来る時刻には山中に逃げ隠れて、夕方に家に帰る状況の日々が続き、なんとしても早急に脱出しなければならぬと考えをめぐらせていた。この頃はソ連兵の監視も厳しく情報が無いので困った。

そのうち村の知人が先に引き揚げて、稚内から動力船を仕立て二、三度往復していることを聞き、村から二十キロほどの赤岩というところへ行つて二晩野宿をするようになった。この中に三、四人くらいが同様に居合わせていた。

本当に船がくるという確約があったわけではなく船が見えるまでは皆不安であった。

三日目の夕方遙か遠くに船影を見つけたときは居合わせた全員の喜びは大変なものであった。その夜は好大気であったので星空を仰いで航海の安全を祈った。幸いソ連兵にも見つからず、海も静かであったが、夜半になって風雨が強くなりやがておしけとなった。

夜明けと共に海は益々荒れて、船の進行はおくれる、海水は侵入する、幾度か沈没するのではないかと危ぶま

れるほどであった。揚水ポンプの故障もあり修理に手間取ってやっと揚水もでき危機を脱した。ようやく稚内港にはいることが出来たのは翌日の午後四時頃で、普通なら十時間位の航路が二十一時間の長時間を要した。不安で誰一人として一睡もしておらず、稚内に上陸したときは全員へとへとに疲れ果てて歩くのがやっとであった。

赤岩から出港した途中で樺太の二丈岩から能取岬あたりでやはり脱出してきたと見られる無動力船を三、四隻見かけたが、その後どうなったのであろうか……。あれだけの風雨とおおしけであり、おそらく波に吞まれてしまったのではないかと思う。

全員無事を喜び合って各自目的地に向かうことになった。我々も稚内に一泊後、目的地の網走に着いたのは昭和二十年九月二十五日であった。私達は先に引揚げていた母や姉の家族、妹や弟達と無事の再会を喜び合い、それからは総勢十七人で一軒の家を借りて住んだ。引揚家族の苦しい生活が長い間続いた。

漁業を始めたのが幸いなことに父が樺太で漁業組合長をしていたこともあったため、樺太庁の水産課長であっ

た人から漁網の引揚者用の割当ての紹介を受けることが出来た。少しではあったがそんなことも幾らかの役に発った。

それから今日まで四十数年変ることなく漁業に従事して来たが良好な漁場は既存の漁家が占めていて、悪条件も重なり経営困難が何年も続いた。

漁業改革があっても歩合は小規模で既存の漁家とは相当の差がついた。かえって漁業の経験のない者が組合を作って漁業経営した者達が早く成功したようだ。

今、父母は死亡して私自体も老人の内にはいったが、どうやら安定した生活が出来るようになった。

## 小学校四年生の終戦の思い出

北海道 小野寺 信子

私は昭和八年に真岡で生まれました。小さい時に父から話を聞かされまして、年号はよくわからないけれど、支那事変だと思えますが奉天に戦争に行つて、無事母の待